

留学先決定に至るまでの経緯

明石 晃一

1. はじめに

今秋より、英国スコットランド、University of St Andrews に進学致します、明石晃一と申します。最初の4年間は St Andrews にて基礎医学を学び、医学部での Bachelor of Science の学位を取得後、University of Manchester の医学部に編入し、3年間の臨床医学を履修し Bachelor of Medicine, Bachelor of Surgery の学位を取得する見込みとなっております。

2. 進学先の選択と詳細

私の出身の開成高校は、普通科のため、一般に英国の大学医学部入学に必要な A-level や IB Diploma 等の他の資格を得ることは出来ません。そこで、英国に存在する医学部を持つ大学のうち、英国外からの留学生は医学部への入学に際し、1年間の International Foundation Programme for Medicine を医学部に併設している場合は、その課程を経ることとなっております。その課程では、A-level Standard を基軸に置いた医学に係る生化学等の必要科目に加え、英国 General Medical Council が定める MMI (Multiple Mini Interviews) において言語化が必要となる医師としての資質の養成や、論文執筆の指導全般、加えて UCAT (University Clinical Aptitude Test) に向けた学修がカリキュラムの内に組み込まれています。これを終えたのち、医学部での基礎医学及び臨床実習の課程を経て、大学医学部の卒業試験を合格することにより、General Medical Council に医師登録がなされ、英国の医師としての資格を正式に取得するという流れになっています。

3. 留学を志すまで

高校2年時、The Murata US-Japan Scholars Program の開成学園代表(3名)に選出され、米国 Choate Rosemary Hall に1.5ヶ月ほどの期間留学をしました。現地では Precalculus の講座にて簡単な数学の授業を受講したのに加え、Anatomy and Physiology の講座を取り、該当期間の間生理学の座学に加え、羊や牛、猫の解剖実習に取り組みました。実際の解剖では、生命の構造体のそのあまりに精緻なる組成に心を打たれ、その時の経験から外科医を志すようになりました。その後、暫くその夢が変わることはなく医学への興味や熱意も膨れ上がることを続けていましたが、ある時同級生の友人から刺激を受け、コンピューターサイエンスの世界を垣間見たと同時に、自分の元より内在する学問への興味が、医学とコンピューターサイエンスを融合させた研究を、医師という最も人体を知り尽くした立場から俯瞰するよう自分を差し向けたというのが、現在の自分の志たる医学と情報科学を跨ぐ科学者になるという新たなる夢の序章でした。

とりわけ今度の感染症でも多くに理解されたように、英国は医学における研究で最先端をゆく成果を出しました。University of Oxford x AstraZeneca のワクチン開発を始め、米国と比肩する科学研究の実力を発揮する英国のパワープラントたるその魅力は、今更ここ

で語り直すまでもありません。加えて幼少期より度々関わりのあった英国での経験の中で、自国の民と生き方と歴史に確固たる矜持を持つ人々の高貴な考え方に心を打たれ、今ここに私もその世界に飛び込み、将来の科学を担う者としての教育を受けることを決意した次第です。

4. 受験に関する詳細

4-1 英語力

IELTS Academic for UKVI のスコア提出が義務付けられていました。スコアバンドは1回目、2回目共に総合で7.5/9.0だったものの、2回目の受験で(L: 7.0, R: 8.5, W: 7.0, S: 8.0)の内訳となり、こちらの方が前者よりバランスが良かったため、胸を張れる成績ではないものの、やむを得ずこれを提出をしました。Writing と Speaking はこんなもので良いだろうという見込みでしたが、Listening と Reading ではまだ改善すべき点が散見されたため、今後の学習の中で力をつけていきたいと考えています。大学の基準ではこれで十分であったため、受験においては懸念なしという形で事済みしました。

4-2 成績要件

高校3年時の総合 GPA は4.8/5.0であり、これは基準を超えていたので問題ありませんでした。しかし、高校2,3年時では理科の選択科目を物理/生物にしていたのですが、化学を選択していなかったことがネックになり、SAT Subject Test Chemistry のスコア提出を求められました。高校1年時に履修した化学の記憶は完全に消失していたため、試験の受験を要請されてから4ヶ月ほど急いで勉強をし、本番は800点/800点を取れたのでこれもまた特に問題はありませんでした。全体の成績評価では、上の化学の点数に加え、特に数学及び生物の数字が大きめの比重で評価がなされましたが、両者も平均評定は5.0/5.0であったため、こちらも問題はありませんでした。卒業時に「優等賞」を授与されていたこともあり、こちらも追加書類として提出しました。

4-3 推薦状、志望動機書

高校2,3年の組主任の先生(数学科)及び3年間必修授業でお世話になった先生(生物科)に執筆を依頼しました。余談ですが船井財団への推薦状は既出の数学科の先生に加え3年間お世話になった世界史の先生に執筆をお願いしました。

志望動機書については、医師になることへの覚悟や意思、及び自分の場合コンピューターサイエンスの研究との融合を具体的にどう捉えているかといったことを記述し、英文900語程度で収めました。

4-4 課外活動

中学1,2,3,高校1年時、NPO法人 The Blest Council 主催の日本スペイン音楽交流事業において、通訳(英語)として従事した他、高校1年時には、東京市ヶ谷の Instituto Cervantes Tokyoにて行われたコンサートで、手話合唱団の一員として出演しました。

4-5 口頭試問

詳細については割愛しますが、英国における医学史や医療システムの概略について、各問に対して口頭で説明をするという形でした。

5. 追記事項

2021年度日本学生支援機構(JASSO)学部留学奨学生に採択を受けており、船井財団との給付型奨学金併用という形を取らせて頂いております。

6. おわりに

現状、日本から海外への学部留学生の数の動きは年々の流れを見ていると微増といったところで、特に医学部への本入学というのは、極めて稀か無であるというのが事実です。それを現実的な経路で実現しようにも、私が確認する限りでは特殊なルート(高校段階で海外に留学し、そこで必要な資格を取得することで当該国大学医学部への受験条件を得るようなルート、乃至は日本国内であってもA-level, IB Diplomaが取得可能な高校を経るルート)を経由してやっと、といった場合が主たるもので、私が卒業した開成高校をはじめとする一般の普通科の高校から海外大学医学部へ、といった経路は未だ無いも同然といったところでした。そんな中、私が一条の光を見つけ出し、このような突拍子もない夢を語り出したことに、親切にも耳を傾け、更にはその計画に大きな援助をしてくださった船井財団の皆様には、感謝の念が絶えません。国からの支援も賜りつつ、今までない道を創り上げていくというのは私にとっては栄誉そのものであり、現開成学園校長野水勉先生から「英国の医学部への入学をめざすという道を切り拓き、開成の後輩たちにも大きな目標になるだろう」というお言葉を頂いていることから、常に身が引き締まる思いがしております。私の場合、単に医師になるために医学を学ぶだけでは事足りず、並行してコンピューターサイエンスの学習も行っていかなければなりません。多くの方々から頂いた期待を胸に、如何なる苦難も楽しくこなしていきたいと思っております。

以上、第一回の留学報告書とさせていただきます。